

龍樹造・中論無畏疏 (前續)

寺本婉雅譯註

(18)此の生に於て業と業との

一切の二種の(不失法は)

そは差別して生じ

異熟もまた住す

「如是二種業」 「二々の業の現在に於て、

現世受果報」 かの法が生ず、

或言受報已」 一切の二種のかの法が生ず、

而業猶故在。」 異熟に於ても亦住す。」

vipakve 'pi ca tiṣṭhati// (p. 321)

此の生に於て一々の業は思 (Sems-pa) へ匪口 (bSam-pa) との差別、若ば善と不善との差別の二種の一切の不失法の總ては各別に生ずる。異熟に於ても亦住す。ふた業は異熟の因によりて滅するが如きは決定性にあらず。そは住し終るも尙果を生ずる能はず、果は生じ終るが故に、決定して消費し (p.72a) 罷へやる効の如し。/In diesen Leben entsteht von beiden Arten von Tat (karma)

jeweies. (p. 96). Dieser Unterschied; wenn auch gereift, verharter./ (p. 96)

(19) 「^①ルハ果は變易^②」 (p. 78a)

死するる滅^{アシム}」[○]

「若度果已滅」

「^{ルの(不^{レバ}失^{レバ})果を越^ルべ^ム」}

「若死已而滅」

「若^{レバ}死^ムして滅^{アシム}」

maranād vā nirudhyate/

Dieses wird durch Wandern der Frucht oder (eig., „ und “ durch den Tod zerstört (nirdhyate)かの不失法は果を變易し、死するる滅^{アシム}」[○] ルハ果は變易^{アリ}ルは修習によつて斷^ルべ^ムと、果を生ずるに由て斷^ルべ^ムなり。死^ムるる^ルは結生^(再)の時、唯獨り生^ル。

(19) 「^ルその別分は無漏^ト

有漏なりと知^ルマシ」

於是中分別

「^ルニ^ル無漏と有漏との

有漏及無漏」

分別が示^ルべ^ム」[○]

/Dessen Unterschied ist als ausflußlos (anāśrava) und a's ausflußbehafted (sāśrava) zu wissen. /

(p. 96)

不失法の分別は二種なりと知るべし、無漏と有漏との業の差別に由てなり。それ故に是の如く不失法あらば有情(Srog-Chigs)は種々の業より生じ、趣と種族と姓と處と時と、諸異の身と根と色と相と力と覺と勝解と戒と受用等の差別を現成すべし。

① 般若燈論— 「度果及命終、至此時而滅、有漏無漏等、差別者應知。」

①中觀釋論— 「或至命終滅、或至度果滅、此無漏分別、彼相亦無漏。」

② 本偈— hPhos-pa (變易) と あひて hPhro-ba (顯現) とはなつてゐない。

③ ④ 原文— hPhos-pa (變易)

(20) 「空性にして斷に非ず

輪廻にして常に非ず

諸業の不失法なりと

佛によりて說かれたり」^①

「雖空亦不斷
『空性』として而して斷ならず、

輪廻として而も常ならず、

諸業の不失は

Karmaṇo 'vipraṇāṇaç ca

業果報不失
是名佛所說。」 佛によりて說かれた法なり。」

dharma buddhena deśitaḥ / (p. 322)

/Als Leere (Śūnyatā), Unzerstörbarkeit (anucheda), Weltwanderung (samsāra), Unnewiges
(aśāśvata)

Ist der Taten (karma) Unverlierbarkeit durch den Buddha gelehrt worden? (v. 96)

是の如く何故となれば業と果とに關係す、それ故に空性も亦認めらるなり。諸行は外道等によりて廣く分別せらるゝ我に由て空なるが故なり。斷も亦あらず、不失法は決定して住するが故なり。輪廻も亦認められ、かの趣は異別に諸行を現成する相あるが故なり。常も亦あらず、業は滅するが故なり。諸業も亦不失法なり。不失法 (Chud-Mi-Za, aviprana) といはるゝ法を佛は説き給へり、其れを又成するが故なり。かるが故にかの分別を此に (p.78b) 認むるなり。

此に釋して曰、かの二の分別は常と斷との過失より脱せず、この故にそれ等は正しからず。何故に然るや。是の如く若し業は自性 (Svabhāva, No-Bo-Ñid) に由て小分成就することを認むるならば是れに由て業の存することは、相續に關係するに由るか、若是不失法に由て攝持せらるゝにより果と結合するなりと思惟することは又正しかるべしと計慮するとか、常にかの業は自性に由て成せらるを認むべからず、その時根據 (所) なきが故に、それ等の思惟は認むべからざるが故なり。

- ① 一般若燈論「不斷」 中觀釋論「不斷」 本偈—Med (無)
- ② 一般若燈論「不常」 中觀釋論「不常」 本偈—Min (非)

若は業は如何ぞ認むべからづとハルム。釋して曰、

(21) 「何が故に業は無生なりエ」

/Gai-Phyr Las-Ni Skye-Med-pa//

「諸業本不生、「何故に業は生せんか々」

//Karma na-utpadyate kasmāt

/Weshalb karma ohne Entstehen (ist),

此の故に認むべからず、是の如く不生ならば如何ぞ認めらるべか。何が故に業は無生とハルム。釋して曰、

(21) 「是の如くの自性なれが故に」

/ñDi-Ltar ^①No-Bo-Med Dehi-Phyr/

「ニ無定性故」 「それらの無自性なるが故に」

niḥsvabhāvān yatas tataḥ/ (p. 323)

/Deshalb, weil es ohne An-sch-Sein ist/

何故となれば業は自性(No-Bo-Ñid)なし。いの故に生なれが故に業は認むべからず。

此に問て曰、業は生あるべし、何がハルムとなれば、世尊に由て諸業は不失法(Chud-Mi-Za)なりと説め給ひしが故なり。此に釋して曰、

(21) 「何が故ぞなれば、そは不生なり、

/Gai-Phyr De-Ni Ma-Skyes-pa/

/De-Phir Chud-Zar Mi-hGyur-Ro/

「諸業亦不滅、「まだ未だ生ぜるが故に」

/Yasmañc ca tad anutpannānī

以“其不生故” それ故に滅する、^{ムルムル}。

na tasmād vipranaqyati// (p. 324)

Weil dieses (sc. karma) nicht entstanden ist, deshalb wird es nicht verloren./ (p. 97)

世尊によりて何故ぞなれば業は不生なり。の故に失せむや。説め給く。に由て業は無生なるを能く成するなり。他に生せば應に不生となるべし。如何にして成するかたるは、總て生ずるゆゑあた死せらるべし。何故となれば是の如くならば、それ故に生むば失せらべし。若くも不生なれば失せれず。

① 般若燈論—「業從本不生、以無自性故、業從本不滅、以“其不生故”」

中觀釋論—「諸業本不生、非伺察可得、業力心相續、業果俱壞。」

② 本偈—「是の如く本性なし此の故ニ」 /ḥDi-Utar Rai-bShin-Med Dehi-Phyr/

本性=Rai bShin (Rākṛiti, 數論の自性と同語)今は原文長行に「自性なし」(No-Bo-Ñid-Med-pa)ある語に據つて原文にセ dÑos-Ñid-Med (存在なし, na-bhāva)ある誤字を訂正して自性とした。

此に問て曰、若し業に自性あらば、心に由て何の過失とならば。此に釋ひて曰、

(22) ① 「若し業に自性あらば、
常となるべし。疑ひなし」

//Gal-Te Las-La No-Bo-Ñid Yod/

/Rtag-par-ḥGyur-ba The-Tshom Med/

「若業有性者、 「若し業に自性あらば、

是則名爲常」 疑ひもなく常なるべし。」

chācvatain syād asaniçayaui/ (p. 324)

/Wenn bei Tat (karma) An-sich-Sein wäre, so würde sie ohne Zweifel ewig sein./ (p. 98)

若し業之體性 (Svalbhāvat, No-Bo-Ñid) 無^レ、常^ニ無^レ。即^ム(p. 79a) 説ひなし。本性 (prakṛiti, Rai-bShin) は不變なるが故に。是の如く業は常^ニ無^レ。心^ニ由て何の喪失にならん^レ。釋して曰。

(22) 「業は所作に非^レるべし」

/Las-Ni Byas-pa Ma-Yin-hGyur/

常^ニ所作な^ムが故に】

/Rtag-la Bya-ba Med-Phyir-Ro//

「不作亦名業」 「作らねば^レ業せあるべし」

/Akṣitain ca bhavet karma

常則不可得」

【何故とならば常^ニ作られざるが故に】

kriyate na hi çāçvatain// (p. 324)

/Tat (karma) wäre dann nicht getan (akṛita), weil Ewiges nicht getan wird./ (p. 98)

業は常^ニ無^レ。所作に非^レるべし。常^ニ所作な^ムが故に。業は不所作なるに果を享受するにありと思惟せば、過去に^レ此に成^レりし。

① 般若燈論—「業若有_ニ自體、是即名爲_ニ常、而業是無作、常法無作故。」

中觀釋論—「若業本不生、業亦何有_ニ標、若其有_ニ所生、彼亦何不_ニ標。」

② 本偈—Gal-Te Las-La Raih-bShin-Yod. (註) 業に本性あらず(註原 Raih-bShin は Prakṛiti にて本性を譯せらるゝや數論中の語と同一な^ム)。

(23) 「如何にして業は不作ならん」

不作と會合する怖畏(ぬふ)マ」

//Ci-Ste Las-Ni Ma-Byas-Na//
/Ma-Bya-pa Dai Phrad h̄jigs-h̄Gyur/

「若有不作業」 「誰が作^ハれ^ルるかのなむ^ビ」

不作而有罪、 作^ハれ^ルる会合する怖畏ある

/Akṣita-abhyāgama-bhayaṁ
syāt karma-akṣitakām yadi/

/Wenn aber karma nicht getan ist, so wäre die Furcht des Erreichens von ungetanem./

如何にしても業が不作にして、又果を生じたまへば、かへして不作と會合するの怖畏を生やるに至るマ。

復又、

(23) 「或は梵行に住むる者が

アリに過失に墮^ハマ」

「不斷於梵行」 「非梵行に住^ハるアリハ

而有不淨過、 過^ハだモ、アリ伴來^ハマ」

/Tshainis-Spyod gNas-pa Ma-Yin-pahai/
/De-la Skyon-Du Thal-bar-h̄Gyur/
/Abrahmacarya-vāsaç ca

/Auch bei einem nicht in heiligem Wandel Lebenden (abrahmacaryā-vāsa) würde der Fehler zutreffen/ (p. 98)

① 般若燈論「若業是無作、無作應自來、住^ハ非梵行罪。今應得無^ハ罪。」

中觀釋論一此の偈譯缺。

復又、

(24)^①「一切の言語と又

相違するゝも疑ひなし」

「是則破一切、「一切世俗の習慣が

世間語言法」 破ふるゝも疑ひなし。」

sarva eva na samācayaḥ/

//Tha-Sñad Thams-Cad-Ñid Dañ-Yan/
/ḥGal-Bar ḥGyur-bar The-Tshom-Med/
//Vyavahārā virudhyante

/Auch wäre ohne Zweifel ein Widerspruch mit allen üblichen Tätigkeiten (vyavahāra) (8p.98)業を作らるゝも尙果を生じうるならば、世間は果の爲めに言語を造らしめ、農業と商業と牧畜とを求め、王に奉仕するゝことへ學問と工巧と技藝とに熟達し、これは夏に於て作すべし、これは冬と春とに於て作すべしと云はるゝなど)の一切の言語とも又相違するゝも疑ひなし。能作と不能作とに其等の果は来るゝとに墮するが故なら。

(24)「功德と罪とを作るゝとの、

差別は亦認むべからず」

「作罪及作福 「徳と罪とを作るゝとの

/bSod-Nams Dai-Ni Sdig-Byed-Pahi/
/Rnam-par dBye-Bahai ḥThad-Mi-ḥGyur//
Punya-pāpa kṣitor naiva

亦無有差別。」 区別は成立せん。」

Pravibhāgac ca yuyiyate// (p. 325)

/Auch würde kein Unterschied zwischen Gutes-und Böses-Tuendem zutreffend sein./ (p. 99)
業を作らしめて尙果を生ずるに違ひ²⁵⁾ 是れは諸徳の作者なり。是れは罪を作らぬのならん。是
るへ是等の差別も亦認むべからず。一切の善い不善いの業を作らるゝのも亦あらむに墮すべし。
それ等の果も亦得べしに墮するが故なり。

① 中觀釋論第一十四偈缺。

復又、

(25)「その異熟の異熟せるものは

再三に異熟すべし

若し何故ならば業は住す

それ故に自性は有るが故に」

「若言業決定 「業が自性あるが故に」

而自由性者 決定すべし

受於果報已 異熟の異熟が、

//De-Yi Rnam-Smin Smin-Gyur-pa/

/Yan Dañ Yai-Du Rnam-Smin-hGyur/

/Gal-Te Gañ-Phyir Las gNas-pa/

/De-Phyir No-Bo-Ñid Yod-Phyir//

//Tad vipakva-vipākai ca

punar eva vipaksyati/

Karma vyavasthitai yasmāt

而應更復受」
更に又異熟すゞ

tasmāt svābhāvikam yadi// (o. 326)

/Dessen (scil. karma) Reifung schon gereift ist, das würde wieder und wieder reifen,

Wenn Tat (karma) deshalb, well sie vorhanden (vyavasthita) ist, an sich (svābhāvika) wäre/

(p. 99)

業を作らずして尙果を生ずるならば、かの業の果は異熟し盡へやうのこも亦再||他の異熟は熟すべし。何が故に云ふとなれば、若し何故とならば、業は自性 (svahāva, Nō-Bo-Ñid) によるて決定して住す。それ故に自性あるが故なり。

① 般若燈論—「以^二有^一業^二住^一故、而名^二不^一失²者、亦應^二興^一果^二」、今復更興^一果[○]」

中觀釋論—「若法有^二自體^一、有²業¹而可住、||世間²報¹」、彼業還復在[○]」

② 本偈—「そは異熟の異熟せるものは

//De-Ni Rnam-Smin-Gyur-pa/

再||に異熟すべし」

若し本性 (praktiti) あるべし

何故ぞかの業は住するが故^二○」

/Yan Dan Yani-Du Rnam-Smin-hGyur/

/Gal-Te Rai-bShin Yod-Na-Ni/

/Gan-Phyr Las gNas De-Yi-Phyr/

此に問て曰、業は有るのみにして、業の因は諸煩惱の存するが故になり。此に釋して曰、

(26) 「此の業は煩惱を自體とす

それらの煩惱は如實に非ず

若し煩惱が如實に非ずば

業はれに由て如何にせらるぐか

「若諸世間業 「れ業は煩惱を自體とする

從於煩惱生 かの煩惱は如實に非す

是煩惱非實 若しかの煩惱が如實に非ずば

業當何有實」 業は如何にして如實にてあるか

karma syāt tattvataḥ katham // (p.326)

/Diese Tat (karma) ist kleśa-wesenhaft, und die Qualen (kleśa) sind nicht wirklich (tattvataḥ)

Wenn diese Qualen nicht wirklich sind, wie sollte karma durch jene bewirkt sein ? / (p. 99)

此の業は煩惱の因より生ずるなり。爾の煩惱は生なれが故に、自性 (Ño-Bo-Ñid) なれが故に
縁生 (bRten-Nas-Byuin-ba) の故に、如實に非れるが故に。若し是の如くなれの煩惱が如實 (Yan-Dag-pa) に非れるなり。爾は今がの業と煩惱とは、如何にせらるぐか。業の因の諸煩惱は自性なれが故なり。

此に問て曰、業と諸煩惱とは自性のみ存すべし。諸煩惱の果と業と身相とあるが故に、業の果は身相あるが故なり。

本偈--「業は如何にして如實にやる？」

/Las-Ni Yan-Dag Ji-Ltar-Yin/

此に釋して曰、

(27) 「業と諸煩惱とは

諸身の (p.80a) 縁なりと説く

若し業と煩惱とは

そは空ならば 身を如何に説くか』

「諸煩惱及業

是說身因緣」 諸身の縁なりと説く

煩惱諸業空

業と諸煩惱とは

何況於諸身」 若し等が空なら身に何の縁

あるや。』

/Tat (karma) und Qualen (kleśa) werden als Bedingungen der Leiber gelehrt.

Wenn diese karma und kleśas leer sind, wie sagt man da „Leih“? / (p. 100)

此に汝は、業と諸煩惱とは自性あるのみ、それ等の果あるが故ならム如くゆせ、誰によれば、業と諸煩惱とは諸身の縁 (Pratyaya, Rkyen) たつむ説へ、いふば誰などある、眞證こそ非也。何の故に

「ふふ。業と諸煩惱とは自性なみが故に、それ等の果身も亦自性なみが故なり。

此に問て曰、業は唯あるなり、その果を受用 (Sainyojana, Loms-Spyod-pa) ある享受者あるが故なり。若し如何ぞ知ると問はシ。答曰、

(28) 「無明に覆はるゝ總ての人び

渴愛を具す、そは享受者なり

そは又作者と異なるべし

其者は亦それに非ず。

「無明之所蔽

「無明に覆はれたる衆人は

受結之所縛

彼は渴愛を結縛する享受者なり

而於本作者、

彼は作者と異なるべし

不卽亦不異。」又彼(作者)は實に彼に非ず。

/Der durch Unwissen bedeckte Mensch, mit Verlangen (trishna) behaftet, ist der Genießer;

Er ist weder ein anderer als der Täter, noch ist er eben derselbe./ (p. 100)

世[等]無始無終經](Thog-Ma Dai Tha-Ma-Med-pahi mDo)等、「無明に覆はるゝ諸衆生は、渴愛

//Ma-Rig bSgribs-pahi Skye-bo-Gai//

/Sred-Ldan De-Ni Za-Ba-Pa-Bo/

/De-Yan Byed-Las gShan-Min Shin//

/De-Ñid De-Yan Ma-Yin-No//

//Avidyā-nirvito jantus

trishna-sainyojanaç ca sah//

Sa bhokta sa ca na kartur

anyo na ca sa eva sah// (p. 328)

の一切結を有すと云へるものと、是の如く若し汝自から此の罪業を作らば、汝自身は亦その異熟をひとしく享受せらるべく要すと説き給へり。そは又作者と異ならず、又それはその者にあらず、其者と異者とも言はれらるが故に。この故に業も亦唯有るなり。

- ① 般若燈論— 「業不_二從_一緣生、不_二從_一非緣生、以_二業無自體、亦無_二起_一業者。」
中觀釋論— 「業不_二從_一緣生、不_二從_一非緣生、見_二有_一業相違、是故無_二作者。」

此に釋して曰、

(29) ① 「何故とならば此の業は

縁より生ずるに非ず

非縁より生ずるにも非ず

それ故に亦作者もなし。」

「業不_二從_一緣生、

「縁所生のもの(業)も

不_二從_一非縁生、

非縁所生の業も

是故則無_二有_一

有_二らざるが故に

能起_二於_一業者。」 それ故に作者も亦あらず。」

/Weil diese Tat (karma) weder aus Bedingung entstanden, noch aus Nicht-Bedingung entstanden ist, deshalb existiert auch nicht der Täter/ (p. 100)
かの作者は亦かの業の如く不生なるが故に、作者は滅やるが故に、事質として在らるが故に、業と作者とはなし。

① 般若燈論— 「業不_二從_一緣_二生_一 不_二從_一非_二緣_一生_二 以_二業_一無_二自_一體_二 亦_二無_一起₂業₁者₂」
中觀釋論— 「業不_二從_一緣₂生₁ 不_二從₁非₂緣₁生₂ 見₂有₁業₂相違₁ 是故無₂作₁者₂」

復又、

(30) 「若し業と作者となけれども

業(より)生ずる果は何處にがあらん

若し果存する」となれば

受用者の何處にがあらん。」

「無業無作者

『若し業と作者とが存せばねば

何有業生果

何處にか業より生ずる果あらん

若其無有果

若し果が存せざるべからず

Asaty atha phale bhokta

//Gae-Te Las Daū Byed Med-Na/

/Las-Skyes ḥBras-Bu Ga-La-Yod/

/Ci-Ste ḥBras-Bu Yod-Min-Na/

/Za-Ba-po Lta Ga-La-Yod//

/karma cennāsti kartā ca

kutah syāt karmajān Phalain/

何有受果者」 何處にか享受者^{ムカシ}」

kuta eva bhāvīsyati// (p. 329)

/Wenn Tat (karma) und Täter nicht existieren, wo ist die aus der Tat (karma) entstandene Frucht? Wenn aber die Frucht nicht existiert, wo (her) wird ein Genießer sein?/ (p.101)

若^レ(p. 80b)觀察するに業のためが故に、作者も亦なれば、業より生ずる果は何處にかあるべ。若し果が存するふれぬるねど、受用者の如めは何處にかあるべ。受用者の語を説くべく^{ムカシ}、因なまが故に。

此に問て曰、如何に作者と業と果と受用者と業と煩惱等なしむし、そは洵に決定的なるべ。此に釋して曰、

凡そかの縁起 (Pratitya-samutpāda, Rten-Ciñ hBrēl-par-hByuiñ-Ba) に於て有りと、或は無しと^{ムカ}はるべが、何處に正しから。是の如く執を退轉せんが爲めに此の喻を知るべし。

(31)^①「如何に變化を示す

圓滿なる神通を以て

變化し、或は變化は他を變化せしむ

かの變化により亦他(を變化する)如^{ムカシ}

龍樹造・中論無畏疏

/Rdsu-hPhrul Phum-Sum-Tshogs-pa-Yis/
/Sprul-Shiñ Sprul-Bahaiñ gShan-Sprul-Byed//

/Sprul-pa Des Kyaiñ gShan-Dag-Ltar//

「如_三世尊神通」 「教主が變化のゆのを

/Yathā nirmitakañ cāstā

所作變化人」 神通の成就に依て變化する如く

nirmimita rddhisainpadā/

如是變化人」 變化されたる變化人なる彼は

Nirmito mrnimitānyāñ

復變作他人」 他のものな變化^{アオ}

sa ca mrmitakah punah/ (p. 330)

/Wie durch vollkommene Zauberkraft der Mester einen anderen Zaubermenschen schafft,

Der Zauber mensch auch zaubernd einen anderen Zauber menschen, dieser Zauber mensch auch

wieder andere/ (p. 101)

① 般若燈論「如_三佛神通力、現_二作化佛身、於_二是須臾間、化身復起_二化。」

中觀釋論「如_三佛神力化、化_二成具足相、是化復起_二化、初化名_二化者_二」

本偈「如何に師によりて變化せられ

圓滿なる神通によりて變化せられ

かの變化者もまた變化を

また再び他を變化するが如く^{アオ}

//Ji-Ltar Ston-pas Sprul-Ba-Ni/

/Rdsu hPhral Phun-Sum-Tshogs-kyis Sprul-Shin/

/Sprul-ba De-Yan Sprul-ba-Ni/

/Slar-Yan gShan-Ni Sprul-ba-Ltar/

(32) ① 「是の如く作者はかの業を作り

心は又變化の相の如く

//De-bShin Byed-Poś Las Gaii-Byas/
② //De-Yai Sprul-paḥi Rham-pa-bShin,

譬は變化によつて變化せられたる他の

所變化の如し」

「如_二初變化人」 「是の如く作者は變作されたるも」

//Sprul¹-ba mDsd¹-pa De-bShin-No//
//Tathā nirmitakākārah

是名爲作者₁

作られたるその業は、

變化人所作

恰も所變化人に由て

是則名爲業^o

變化されたる他の所變化の如し^o」

nirmito nirmitas tathā// (p. 330)

/So ist auch das vom Täter gewirkte karma gezaubertartig,

Wie z.B. andere Gezauberte ein Gezauberter zaubert./ (p. 101)

① 般若燈論—

「此初化身佛、而名爲作者、化佛之所作、是即名業^o」

中觀釋論—

「諸法如_二化相、作作者無₁作、說₁作者等體、皆₁何可₁有^o」

② 本偈—「是の如くかの作者は總ての業を

作り或は變化の相の如し^o」

/Byas-bahai Sprul-pahi Raam-po-bShin/
/De-bShin Byed-po Des Las-Gai/

(32) 「煩惱と業と身等₁、

作者と果等とは、

乾闥婆城の如く、

龍樹造・中論無畏疏

//Nois-Mon Las Dai Lus-Rnams-Dai/
/Byed-pa-Bo Dai hBras-Bu-Dag/
/Dri-Zahi Groi-Khyer-Lta-Bu Dai/

湯焰と夢とに似たり。」

/Smig-Rgyu Rmi-Lam hDra-Ba-Yin//

「諸煩惱及業 「諸の煩惱と業と身體」

//Kleçāḥ karmāṇi dehāc ca

作者及果報 作者と果報とは

kartārç ca palāni ca/

皆如幻與夢、 乾闥婆の相にしべ

Gandharva-naçarākārā

如實亦如響。 又光焰、夢の如へ等。」^o

marici-svapna-saininibhāḥ// (p. 334)

/Die Qualen (kleśa), Taten (karma), Leiber (deha), Täter und Früchte.

Sind gleich einer Gandharvenstadt, ähulich (wie) eine fata morgana, ein Traum/ (p. 101)

一切法を是の如く見るべきなり。

① ① 般若燈論「業煩惱亦爾、作者及果報、如乾闥婆城、如幻亦頃」
中觀釋論「諸法無有體、如乾闥婆城、煩惱業及身、作者果亦然。」

阿闍梨耶、聖龍樹によりて造られたる「根本中論無畏疏」内、「業と果とを觀ずと名けられて、第十七品なり。」(Las Dañ hBras-Bu bRtag-pa Shes-Bya-Ba-Ste Rab-Tu-Byed-pa bCu-hDun-paḥo)